

★ 特別企画：伝統の技を次代につなぐ最新施工事例 ★

施工レポート

# 茶室の「炉壇」をつくる

左官吉田 吉田 一正

四季の移ろいを楽しみ、器や道具、掛け軸、生花など部屋のおちらこちらに季節感をもたせ、おもてなしの気持ちで客人を迎える。亭主が客人にお茶を点て振る舞い、客人は亭主のおもてなしを受けて、お茶をいただく。「茶の湯」ともいわれる茶道は、日本伝統の様式に則り、お茶の点て方だけでなく、所作や動作などの作法のほか、茶碗や茶道具、茶室、床の間にいるまで空間全体を構成する要素としての総合芸術である。

その茶の湯に欠かせない設えの一つに畳の下に備え付けられている小さな囲炉裏「炉壇」がある。千利休によって規格化されたと伝わる「炉壇」は、左官の技によって作られてきた。本稿では土壁の技術が全て詰まっているといわれる「炉壇」の作り方についてレポートしていく。

(編集部)

## ①炉壇の木箱(炭櫃)

炉壇の縁の内法の大きさが一尺四寸で決まっている。これは炉壇の上に乗せる炉縁という工芸品の飾りの規格である一尺四寸の二寸二分角に合わせたもので、左官、大工、畳に至るまで全ての仕事は、この炉縁の規格に合わせていると良い。

そのため実際には縁の内法は炉縁を納めやすくするために一分の遊びを設けて一尺四寸一分で仕上げている。また、普段は蓋をするように畳が敷かれているが、その畳の厚みが関東と関西、中京で変わってくる。関東畳の厚みは二寸のため炉縁から二分余る。そのため木箱の天端から散を二分みる必要がある。また、関西畳の厚さは二寸二分なので散を四分みなければいけない。依頼された地域の畳の厚みを確認して散を取らなければ、炉縁を入れたときに高さが合わなくなってしまう。



①炉壇の木箱(炭櫃)



②小舞搔き



③荒壁付け